

## 東京女子大学「外国人留学生特別科目」自己点検・評価及び外部評価を終えて

本学は、教育の改善に役立てるため、大学全体で組織的かつ恒常的に PDCA サイクルを回し、その一環として毎年テーマを定め、自己点検・評価活動を行っております。今回は、外国人留学生が受講する標記科目群についての自己点検・評価を実施いたしました。

自己点検・評価委員会が中心となりまとめた評価結果について、客観性・公平性を担保するため、外部評価委員として小林浩氏（リクルート進学総研代表）、加藤早苗氏（インターカルト日本語学校校長）、吉富朝子氏（東京外国語大学大学院教授）にご協力をいただき、書面審査による外部評価を実施いたしました。

先生方にご執筆いただきました外部評価報告書は、自己点検・評価報告書と共に本学公式サイトに掲載いたしましたので、ご高覧いただければ幸いです。

本学では、東京女子大学グランドビジョンに「国際社会で活躍する女性の育成」を掲げておりますように、「グローバルビジョン育成に向けた教育」を推進しております。今回の自己点検・評価活動は、当該科目群の見直しのみならず、本学の外国人留学生教育全体の方針を見直す貴重な機会となりました。外部評価委員の先生方には、報告書についてご評価いただき、また、多くの有益なご助言をいただきました。深く御礼申し上げます。今回頂きました評価内容は、全学で共有し、教育改善に役立ててまいります。

2017年7月

東京女子大学 学長 小野 祥子  
自己点検・評価委員長 下出 鉄男

東京女子大学

外国人留学生特別科目 自己点検・評価報告書

2017年5月

東京女子大学自己点検・評価委員会

※ 本報告書では、本学外国人留学生入学試験及び外国人留学生対象日本語学校指定校制推薦入学により入学した学生を「外国人留学生」又は「留学生」とする。また、それ以外の学生を「一般学生」とする。

### 【教育目標】

- 外国人留学生が大学での学習に必要な日本語の運用能力を身につける。
- 外国人留学生が大学での勉学に必要な英語の Reading、Listening、Speaking、Writing の力をバランスよく習得する。
- 外国人留学生が日本の諸事情を学習することにより、日本に対する理解を深める。

### 【点検・評価項目】

- ① カリキュラム・ポリシー第4項に即した教育課程になっているか。

＜カリキュラム・ポリシー第4項＞

知識の活用能力、批判的・論理的思考力、課題探求力、問題解決力、表現能力、コミュニケーション能力など、社会生活において必須となる汎用的な能力を育成するために、全学年を対象に研究や討論を実践的に積み上げる参加型の少人数授業を実施する。

- ② 教育目標【資料1】に沿った授業内容となっているか。
- ③ カリキュラム・ポリシー第4項および教育目標に示した能力の育成ができているか、学修成果があらわれているか。

### 【現状の説明】

外国人留学生特別科目は外国人留学生のための科目群で、日本語、英語の運用能力の養成と日本の諸事情を学習することを目標としている。学部の正規課程留学生の他に、海外の協定校からの交換留学生が履修する場合や、外国人研究生、大学院外国人留学生が聴講する場合もある。なお、現在は国際交流センターが窓口となり、当該科目の授業計画を行っている。

カリキュラム・ポリシー第4項を踏まえ、本科目群に表1のような科目を配置している。2016年度の履修者数は【資料2】のとおり。

表1 外国人留学生特別科目の概要

授業科目コード	授業科目	授業期間 (15週単位)	毎週 授業時間	単位数	必修・選択必修 ・選択の別	履修年次	備考
ZZ101	日本語Ⅰ（入門）	1	8	4	必修	1	第一外国語の必修8単位に代替
ZZ102	日本語Ⅱ（応用）	1	8	4	必修	1	
ZZ103	英語初級Ⅰ	1	4	2	必修	1	第二外国語の必修4単位に代替
ZZ104	英語初級Ⅱ	1	4	2	必修	1	
ZZ105	日本事情A	1	2	2	必修	1	総合教養科目の「人間社会の仕組みと問題」2単位に代替
ZZ106	日本事情B	1	2	2	必修	1	総合教養科目の「人間の知的生産」2単位に代替

ZZ107	日本事情C	1	2	2	必修	2	総合教養科目の「人間自身を知る」 2単位に代替
ZZ108	日本事情D	1	2	2	必修	2	総合教養科目の「人間の知的生産」 2単位に代替

「日本語」について：

「日本語Ⅰ（入門）」、「日本語Ⅱ（応用）」の2科目を配置し、大学での学習に必要な基礎的な日本語スキルを習得すること、日本語運用能力を高めることを到達目標としている。1年次の前期に「日本語Ⅰ（入門）」（4単位）を、後期に「日本語Ⅱ（応用）」（4単位）を、それぞれ週4コマを2日間に分けて履修し、これら2科目計8単位は、外国語科目のうち第一外国語の必修8単位に代えることができる。連続した2コマずつを（2016年度は月曜日2、3時限、金曜日2、3時限）それぞれ専任教員と非常勤講師とで担当している。「日本語Ⅰ（入門）」の週4コマと「日本語Ⅱ（応用）」の週2コマは、CALL学習センターを利用して授業を行っている。

1年次前期で履修する「日本語Ⅰ（入門）」の授業では、レポート作成に必要な文章表現とレポート作成の基本ルールの習得、「ドキュメンタリー」を制作しながら発表力と発信力を習得することを目的としている。1年次後期で履修する「日本語Ⅱ（応用）」では、プレゼンテーション技術、批判的に読む力、論理的文章を書く力を養っている。

「英語初級」について：

「英語初級Ⅰ」、「英語初級Ⅱ」は、英語力の低い留学生を対象に設置している科目であり、大学での勉学に必要な英語のReading、Listening、Speaking、Writingの力をバランスよく習得し、英語によるコミュニケーション力を高めることを到達目標としている。1年次の前期に「英語初級Ⅰ」（2単位）を、後期に「英語初級Ⅱ」（2単位）をそれぞれ週2日、計2コマ履修し、これら2科目計4単位は、「外国語科目」のうち第二外国語の必修4単位に代えることができる。授業担当者は1名で行っている。

2015年度および2016年度は、入学時のプレイスメントテストで、対象者全員に一定の英語力があることが確認されたため、開講していない。それらの学生は、「英語初級」の代わりに、一般の学生向けに開講している第一外国語の「ReadingⅠ」と「Discussion Skills」の計4単位を履修している。

「日本事情」について：

外国人留学生が日本語で日本について学習することにより日本に対する理解を深め、あわせて日本語の運用能力を高めることを到達目標としている。

1年次に日本の社会について学習する「日本事情A」および日本の歴史について学習する「日本事情B」を履修する。「日本事情A」は総合教養科目の〈人間社会の仕組みと問題〉領域、「日本事情B」は〈人間の知的生産〉領域の各2単位に代えることができる。2年次に日本の思想、宗教、日本人のこころ等について学習する「日本事情C」および日本の文化について学習する「日本事情D」を履修する。「日本事情C」は総合教養科目の〈人間自身を知る〉領域、「日本事情D」は総合教養科目の〈人間の知的生産〉領域の2単位に代えることができる。

## 【点検・評価、長所・問題点】

外国人留学生特別科目は、カリキュラム・ポリシー第4項に示した知識の活用能力、批判的・論理的思考力、課題探求力、問題解決力、表現能力、コミュニケーション能力など、社会生活において必須となる汎用的な能力の育成を目指した教育課程となっている。

### 「日本語」について：

1年次前期のクラスでは、レポートの作成、ドキュメンタリーの制作・発表、後期のクラスでは、プレゼンテーション、読解、作文を学ばせている【資料3「日本語Ⅰ」】。いずれのクラスもカリキュラム・ポリシー第4項に示した「知識の活用能力」「批判的・論理的思考力」「問題解決力」「表現能力」「コミュニケーション能力」「社会生活において必須となる汎用的な能力」を身につけさせる授業内容となっている。また、教員間で連絡を密に取り合い、授業の進捗状況や教育効果などを共有している。授業担当者は個々に授業方法を工夫しており、日本語の運用能力「読む、聞く、話す、書く」の4技能をバランスよく身につけられるプログラムとなっている。また、2コマ続きの集中的な授業であることにより、効果的なトレーニングを可能としている。

特に、「ドキュメンタリーの制作・発表」のクラス【資料3「日本語Ⅱ」】では、大学や社会での学びにおいて、様々な状況から「問い」を見出し、他者とのやり取りを通して、解決策を考え、行動するという言語技術の養成を重視している。取材依頼から字幕の作成、ドキュメンタリーの上映会の運営にいたるまでの各プロセスにおいて、本人達が自発的に日本語コミュニケーションをとっている。多様な能力を統合して日本語を発信するトレーニングをさせていることは、「討論を実践的に積み上げる」授業を展開していると評価できる。これに限らず「日本語」の授業全体が、問題解決力、表現能力、コミュニケーション能力を養成する場となっている。

留学生に対するアンケートで、「大学での学習に必要な日本語の運用能力を身につけるために役立ったか」という問いに対しては、8割前後の学生が「非常にそう思う」「そう思う」という肯定的な回答をしている【資料4】。

一方、国際交流センターや学科・専攻からの要望としては、ディスカッション、プレゼンテーションだけでなく、「書く力」の養成に力点を置いたクラスの強化があげられている【資料4】。これについては、検討を要する。

### 「英語初級」について：

本科目設置当初は、出身国・地域での英語教育が不均一なこともあり必須であったが、近年では、入学時のプレイスメントテストにより一定の英語力に達していることが確認できており、2015年度、2016年度は開講していない。（本学では、2014年度から入学者全員を対象に TOEFL ITP テストを実施し、2015年度からはそのテストを英語科目のプレイスメントに用いている。また、留学生のスコア平均は本学の全体平均を上回っている。）

問題点の一つは、第一外国語科目の授業ではグループワークなどのアクティブラーニングの手法を積極的に取り入れているが、当該科目では開講した場合でも履修者が少なく、適正な人数でグループワークを行うことができない点である。また、履修した留学生が引き続き英語を学習しようと考えても、履修可能な科目は2～4年次の一般学生を対象に設置している選択科目（一定の分野・テーマを扱う、より高度なレベル）のみであり、段階的・体系的に学習することができない。

### 「日本事情」について：

本学専任教員の授業担当者への聞き取りによると、ある科目においては、授業で取り上げるテーマについて、予習としてキーワードや現象の背景など、調べてきた事を授業担当者が確認する時間を設けている【資料3「日本事情C」】。また、テーマに即して自国の事情や、日本について調べて分かったことを発表し、互いの発表内容を比較したり、確認させている。「知識の活用能力」、「表現能力」、「コミュニケーション能力」のほか、自ら課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下す「課題探求力」を身につけられる授業となっており、カリキュラム・ポリシー第4項に沿っていると評価できる。

また、留学生に行ったアンケートの結果においても、「日本事情」の授業が、教育目標に掲げる「日本に対する理解を深めるため」に役に立ったという肯定的な回答、「日本語の運用能力を高めるため」に役に立ったという肯定的な回答はおおよそ7割を占め【資料4】、科目の到達目標は実現されている、と評価できる。

日本事情の授業のあり方は当初より大きく変化しており、体系的な知識の習得を目的とした講義型授業に加え、ディスカッション等コミュニケーション活動を中心とした形態の授業も行われるようになってきている。上述の授業は画一的な「日本事情」を一方的に教授するものではなく、シラバスにも、ディスカッションを通じ、日本の現象の背景を多角的に考える視点を養い、学んだ知識についての理解を深めさせることを明示している【資料3「日本事情C」】。従って、今日の日本事情教育の流れに沿ったものと考えられる。

### **【改善事項】**

国際交流センターや学科・専攻から「書く力」の向上についての要請が多いことから【資料4】、日本語力を高め、「書く力」を補完する方策を検討していく。

「英語初級」は、配置の必要性について再度検討を要する。近年の留学生の英語力や履修傾向に鑑み、英語科目については、留学生も一般の学生と共通の授業を履修することができるようにするのが望ましい。但し、その場合、留学生の必修要件および卒業要件も合わせて見直す必要がある。

「日本事情」については、今後も日本事情教育の現状を確認しながら、国際化する社会に応えられる授業の内容、方法を検討していく。

本学では、創立100周年を控え「東京女子大学グランドビジョン」および「大学として育成する人物像」を定めている【資料5】。グランドビジョン第2項には「グローバル化・高度情報化した21世紀の社会を切り拓き、国際社会で活躍する女性を育てる」ことを掲げており、大学として育成する人物像第2項には「国際的な視野をもった地球市民としての女性」をあげている。現在、本学は、グローバルビジョン育成のための教育の推進、国際的視野を育む教育環境の整備などに取り組んでいる。これらの方針に沿って、今後留学生を広く受け入れるのであれば、3ポリシーに照らし、大学として外国人留学生教育についての方針を見直す時期に来ていると考えられる。本学の教育課程における「外国人留学生

特別科目」の位置付けを再検討し、留学生の能力とニーズに柔軟に対応できるシステムを構築することが求められる。

なお、外国人留学生特別科目全体の教育目標、各科目の到達目標の再確認、学修成果の測定方法等、将来の方向性を踏まえつつ、本科目群を統括し管理していく責任部署について将来計画推進委員会で早急に検討する必要がある。

以上